たん自動吸引装置

夜間の負担を軽減

患者、家族

病院、会社など共同開発

ＡＬＳ（筋萎縮性側索硬化症）などの病気で、人工呼吸器を使っている患者のたんを自動吸引する装置を、大分協和病院（大分市）と、医療機器製造会社「徳永装器研究所」（宇佐市）などが共同開発し、８月から販売が始まった。これまでは夜間、家族が何度も起きて手動でたんを吸引しなければならなかったが、新しい装置で負担軽減が期待される。【高芝菜穂子】

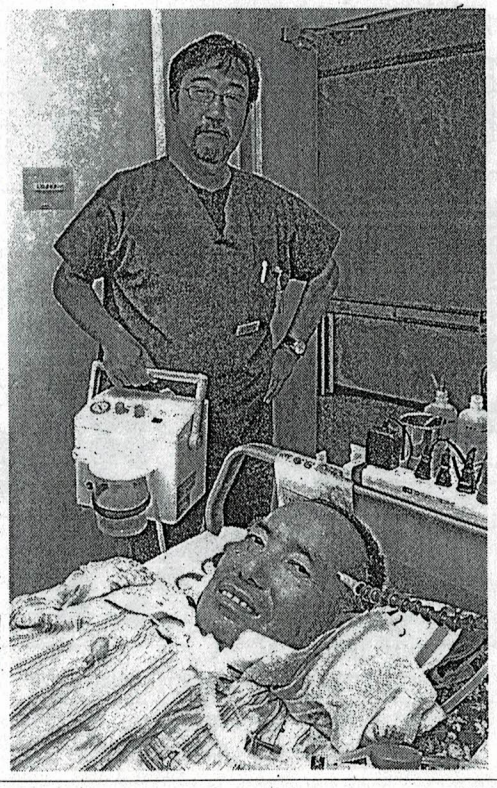
同病院の山本真院長（56）は10年ほど前、患者宅に目覚まし時計が6個あることに気付いた。自力ではたんが出せない患者のため、夜間2時間おきに家族が起きて、たんを吸引するためだった。「せめて夜間の吸引だけでも人手に頼らずにできないか」

従来は、気管内に空気の通り道として挿入している医療器具「気管カニューレ」に、カテーテルを差し込んでたんを吸引していたが、患者はその刺激で苦しんでいた。しかも吸引は1日に15～20回も必要だった。

そこで山本院長らは、カニューレ内部に吸引孔を設け、吸引ラインを通じて、常時少しずつ自動吸引する装置を作った。吸引孔にたんが触れると吸い込む仕組み。臨床試験で患者の意見も聞きながら改良を重ねて完成させた。ただし、たんの量が多い日中は手動の吸引も必要だ。

12年間在宅でＡＬＳの夫・上野克さん（67）＝大分市＝を介護してきた妻幸子さん（66）は昨夏、負担の大きさから倒れたことをきっかけに、自動吸引を導入。「夜熟睡できるようになった」と笑顔をみせる。一方、ＡＬＳで、10年間研究に協力してきた野上昭典さん（60）＝同市＝も「たんを吸引されるのも苦しくない」という。

山本院長は「患者、家族の負担軽減に成功した」と話した。



気管カニューレを首もとにつけた野上さん（手前）と、自動吸引用ポンプを持つ山本院長